

新法「消去法」

石川
ナオ

【人物表】

浮田達夫（50） 高輪印刷社員↓消去人モニター
苦井理（40） 総務省の役人
敷谷剛三（68） ゴミ屋敷の住民
浮田怜子（46） 浮田の妻、主婦
粟津時也（39） 高輪印刷営業部長、浮田の元上司
中野忠司（36） 怜子の不倫相手
敷谷和子（60） 敷谷の妻、故人
淡路 ハローワーク職員
前川 ハローワーク職員
金崎 リサイクルショップ店員
白井 消去人モニター
行政職員数名
アナウンサー
整備員
清掃員
教員
生徒（小学生）数名
ネットカフェ店員
アナウンスボイス（声のみ）
追跡者数名

【想定尺・媒体】

45分～60分 実写ドラマ向け

○敷谷の家・室内

ゴミ袋が積み上がっている室内。

作業着にガスマスク、シューズカバー
着用の行政職員たちがゴミの回収作業
をしている。

その中に作業着ではなくチェックのス
ーツ、蝶ネクタイにガスマスク姿の苦
井理（ホ）が職員に指示をしている。

苦井「はい、どんどん回収してー」

部屋の隅からゴミ回収の様子を俯きが
ちに見ている敷谷剛三（ヨ）。

ゴミ山のゴミをどんどん外に出す職員
たち。

職員の一人が顔を顰め、一気にごみ袋
を放り投げていく。

行政職員「（驚愕の叫び）苦井さん！」

急いで駆けつける苦井。ごみ山の中を
覗き込み、表情を凍りつかせる。

苦井「（悲痛の声）何てことだ……」

行政職員「（叫ぶ）ビニールシート持ってこ

い!! 警察呼べ!!」

敷谷、慌てて苦井の元に駆けつける。

苦井、無表情で立ち上がる。

敷谷、ごみ山を覗き、悲痛の表情。

敷谷「（泣きそうな声で）こんな所にいたの

か……、和子……?!」

ごみ山の中に、腐敗しかけの敷谷和子（〇〇）の遺体がある。

○浮田の家・リビング（朝）

十一月九日の新聞を読みながら珈琲を飲んでいる浮田達夫（〇〇）。

新聞に「ゴミ屋敷死体遺棄事件、不起訴」の見出し。目に黒線の入っている敷谷の写真。

テレビに「来年度より消去法実施」のテロップ、アナウンサーがニュースを読んでいる。

アナウンサーの声「新法『消去法』は、無駄と認定された物を国が消去する為の法律で

す。実施にあたって事前に……」

テレビの前に立つ浮田怜子（46）、「ニュースの途中でチャンネルを変える。ワイドショーの旅行特集が映る。」

怜子「ねえ、そろそろ旅行行かない？ 今度の連休か、年末とか」

浮田、怜子を見ず、新聞を読みながら返事。

浮田「いつ休み取れるかなんてわからないのに……」

怜子「忙しいのはわかるけど、そろそろ気晴らししないと滅入っちゃう」

浮田「（気怠く）わかった、考えておくよ」
新聞を読み続けている浮田。

○高輪印刷・会議室（朝）

会議机を向かい合って座る浮田と栗津時也（39）。

机の上に「解雇通知書」が置かれており、浮田が啞然としている。

栗津「大変心苦しいのですが、業績悪化に伴い早期退職していただくことになりました。

勿論今までの給料や退職金はお支払いします、冬の賞与も善処しま……」

浮田「（大声で）はあ！ 何なんですか?！」

栗津「今説明した通りです」

浮田「だから！ いくら何でも突然では?！」

栗津「突然ではないですよ。前回の人事考課で評価が基準に達しなかった場合は対象になると伝えてありました。残念ながら浮田さんの営業成績は基準に達しませんでした」

浮田「（戸惑い）えっ……評価、って、今まで努力して会社の為に働いてきたのに?！」

立ち上がりテーブルを叩く浮田。

栗津「（冷静に）努力だけしても、結果が結びつかなければ意味がありません」

浮田「私の仕事は無駄だったと……?！」

栗津「担当の取引先は取引終了予定なので引継不要です。後の手続きは総務に確認して下さい、残っている有給も使って……」

浮田「ふざけるな！ 労基署に訴えてやる」
栗津「構いませんが、時間の無駄になると思います。この件は労務士とも確認済みです」
立ち上がり、会議室を去る栗津。
力なく椅子に腰を落とす浮田。

○同・執務室

浮田、自席で荷物整理。
その様子を冷ややかに見ている周囲。
手帳を取り開く浮田。沢山の書き込み。
手帳を閉じゴミ箱へ思い切り捨てる。

○浮田の家・ダイニング（夜）

夕食を食べている浮田と怜子。

怜子「ねえ、向かいの中村さん。ご主人がリストラされたんですって」

浮田、箸を持つ手が止まる。

怜子「やっぱり突然あるものなのね。ねえ、大丈夫？ リーマンショックの時みたいにもうまた早期退職なんてこと……」

浮田「あ、ああ……」

顔を引きつらせながら箸を進める。

怜子「気を付けてよ、もう再就職なんて難しい歳なんだから。あっ、ところでお休みどうだった？ 取れそう？」

浮田「休み？」

怜子「朝に話していたじゃない、旅行の。もう忘れたの？ っていうかさつきから変よ」

浮田「（やや声を荒げて）何でもないよ！」

怜子「（怯え）ちょっと……何よ……」

浮田「いや……ごめん、本当に、何でもないよ。休み、大丈夫、決まったら言う」

怜子、不安そうな顔で浮田を見る。

浮田、黙々と夕食を食べる。

○ハローワーク・受付（朝）

日替わりカレンダー十一月十日。

机上に何枚もの求人票が並んでいる。スーツ姿の浮田、パソコンを操作している淡路を見る。

淡路「やはり浮田さんの経歴や年齢だと、今までどおりの給与条件は難しいと思います」

浮田「どうして、経験はあるのに？」

淡路「役職としての経験がないんですよえ」

浮田「応募してみるだけ駄目ですか」

淡路「先方も時間を無駄にされたくないので、やめておいた方が良いかと」

浮田「（不服そう）わかりました結構です」

立ち上がる浮田。

○公園

ベンチに座っている浮田。コンビニの袋からパンを取り出し食べる。

カラスの鳴き声。通り過ぎる老人。

○同（夕）

鞆を枕にベンチに寝転がっている浮田。

スマホを取り出し、画面を表示。一切の通知はなく、十七時の表示。

溜息をついて立つ浮田。

○浮田の家・ダイニング（朝）

朝食を食べているスーツ姿の浮田。

リビングのテレビに消去法のニュース。

アナウンサーの声「国民の中から消去作業の

モニターが選ばれることになりました」

キッチンで洗い物をしている怜子、浮

田に声をかける。

怜子「ねえ、それ食べたなら、会社行く前に郵

便物沢山来てるの確認しておいてね」

アナウンサーの声「裁判員制度同様、選定さ

れた方は秘密裏に協力をお願いし……」

浮田「え？ ああ」

気のない返事を返す浮田。

× × ×

テーブルの上に郵便物数点。浮田が幾

つか手に取り確認している、DMや高

輪印刷からの封書などの中に総務省か

らの封書。

首を傾げながら開封する。

「消去人モニター選定」の書類。

浮田「何だこれ？」

書類が数枚入っているが大して読まずに捲って行く。最後に説明会の案内状。複数の日程が記載されている、一番上の日付は十一月十七日。

浮田「十七日……今日か」

カレンダーを見る浮田。

浮田「暇だし、行ってみるか……」

浮田、総務省の封書を胸ポケットに入れ、他の郵便はテーブルに放置する。

○総務省・外観

総務省の看板。

前に立ち、口を開けて見上げる浮田。

○同・大会議室

静かな大会議室に一人座っている浮田。

ドアが勢いよく開く音。

苦井「はい、いらっしやいませー！」

ドット柄のスーツに蝶ネクタイの苦井

が、テンション高く入って来る。

浮田「立ち上がり、呆然と苦井を見る。

苦井「浮田へ紳士ぽく名刺を差し出す。

名刺には「自治行政局消去法導入臨時

管理官 苦井理」の明記。

名刺を両手で受け取る浮田。

浮田「あの、お一人ですか？」

苦井「はい、私が担当者ですので」

浮田「聞くのも、一人ですか？」

苦井「機密情報がわんさかありますから。お

一人ずつ丁寧に説明しております」

浮田「そんなに、重大なお話なんですか？」

苦井「そうです、貴方は重大な任務に選ばれ

たのです！」

浮田「任務……？」

苦井「まず、消去法が来年から実施予定なの

はご存知ですか？」

浮田「消去法？」

苦井「ご存知ない！ なるほど！」

舞台の暗転のように会議室の照明が落

ち、プロジェクターで消去法の要項が映し出される。

舞台のごとく一人喋り始める苦井。

苦井「世の中には物という物が溢れ返っております。ゴミなら捨てます。でもよくわからないけどずっと居る物、ありませんか？」

浮田「は、はあ……」

プロジェクターで、コミカルに描かれた消去法のイメージが映し出されているが、にこやかな人間がガラクタの絵を消している、という単純な図解だけ。

苦井「社会に山積した物の中から、無駄だと思われるものを、浮田さん、貴方が『消去人』となって消していくのです！」

浮田「消去人？」

苦井「そうです、無駄認定された物を、消去するのです！」

浮田「（困惑）……？」

苦井「それらは最新技術によって分子レベルで分解するので物質は残りません、文字通

り消去されます！」

浮田「あ、あの」

苦井「ですが無節操に消すわけにはいきませ
るので、我々が管理します。なお、これら
の作業には謝礼金も支払われますんで……」

浮田「あの！」

苦井「はい？」

浮田「さっ……ぱり、わからないんですけど」

苦井「わからない！」

浮田「は……はい（頷く）」

うーんと唸る苦井。閃きに指を鳴らす。

苦井「そうですね、お堅い話ばかり聞いて
いてもさっぱりわかりませんよね」

浮田「いや……まあ……」

苦井「でしたら、実践いたしましょう！ つ
いて来て下さい」

浮田「えっ？」

苦井「レッツゴー!!」

手招きする苦井、会議室を出て行く。
首を傾げながらついて行く浮田。

○古びたラブホテル・室内

ピンクの照明に、回転ベッドや拘束具など、怪しげな備品が置かれている。ややボロい。テレビもブラウン管。

ドン引きの表情を見せている浮田。

浮田「何なんですかここ?!」

苦井「見ての通りラブホテルです」

浮田「はあ？ ふざけてるんですか貴方！

一体何をやる気なんですか?!」

胸や尻を抑え、怯えだす浮田。

苦井、浮田に見向きもせず、アタツシ

ユケースから消去機を取り出す。消し

ゴムのような形をしたスマホサイズの

機械。

浮田「か、帰ります！ こんな怪しげなこと

に付き合ってられません。国の指示とか、

嘘もいい加減に」

苦井「ちよっとそこどいて下さい」

浮田「はあ？」

リモコンをかざすように消去機を拘束

具に向ける苦井。電子音がして拘束具が粒子化して消失する。

目を剥いて驚く浮田。

苦井「エッチしたり、子作りしたりするのに、もうこんな物はいらないでしょう」

浮田、拘束具のあった場所を触り呆然。

浮田「一体……どうなってるんです……?!」

苦井「だから、特殊技術で分子レベルの処理をしているんですよ。ああ機密事項なんで詳しくは申し上げられません」

苦井、リズムよく備品をどんどん消して行く。

苦井「ゴミにも資源にもなりません。文字通り消去を行います。でもね誰でも何でも消せちゃうと問題でしょう？ だから消去人だけが消せるようにしています」

物がなくなり、整然となる部屋。

苦井「いや、綺麗になりましたね」

ポツンと残っている古めかしい電話機をとる苦井。

苦井「すみませーん、終わりました」

ポーンと受話器を置く音が響く。

口を開けたまま部屋を見渡す浮田。

○浮田の家・リビング（夜）

リビングのソファーに座っている浮田。

消去人モニター規定書類を読んでいる。

その後ろに現れるパジャマ姿の怜子。

怜子「じゃあ私、先に寝るから」

浮田、びくっとして怜子を見る。

苦井の声「機密事項が多いので、ご家族にも

暫く秘密でお願いしますね」

書類を閉じる浮田。

浮田「あ、ああ、おやすみ」

リビングから出て行く怜子を見送って、

鞆の中から箱を取り出す浮田。

開けると消去機一式と総務省名義の浮

田の名刺一束が入っている。

手に取り、怪訝な表情を見せる。

説明書をパラパラ捲り、不許可対象物

一覧と説明ページを開き、首を傾げる。
不許可対象物には空缶などリサイクル
資源、生ゴミ、建造物等、その中には
「生物（人間含）」という記載もある。
説明書を閉じ、消去機の電源を入れる。
対象範囲に向けて操作するようメッセ
ージが出ている。

画面をタップする浮田。

対象検索が始まり、テレビや時計、本、
空気清浄機などにホログラムで品名と
劣化具合が%で表示されている。

浮田、空気清浄機に向けて処理を実行、
粒子化して消える。

驚く浮田、消去機をテーブルに落とす。
慌てて拾い、壊れていないかを見る。

浮田「嘘だろ、ほ、本当に消えたぞ……?!」

浮田、部屋を徘徊。棚の中、シンクの
下などを探し、クローゼットを開ける。
浮田、クローゼットに対象検索を行い、
様々な物の劣化具合が表示される。

浮田、ダイエット器具に目を向ける。

浮田「どうせ大した効果もなかっただろうし、
いいだろ……」

浮田、複数あるダイエット器具をどん
どん消す。

その横にあるラジカセや木箱入の高級
な器まで勢いで消してしまう。

浮田「あっ……しまった。まあ使っていないも
んだし……いいか」

浮田、クローゼットを閉める。

○同・ダイニング（朝）

朝食を食べている浮田。

怜子がリビングをうろうろしている。

浮田「どうした？」

怜子「ねえ、空気清浄機、ここになかった？
しまった、という顔をする浮田。

浮田「（慌てて）あ、ああ、あれ、壊れてた
から捨てちゃったよ。今日帰りに新しいの
買ってくる」

怜子「ええ、そうなの？ 結構いいやつだ

ったのに……昔のなかったかしら」

クローゼットを開ける怜子。

あつ、と気まずそうに立ち上がる浮田。

怜子「ないわねえ」

クローゼットを閉める怜子。

浮田「何か、なかったか？」

怜子、立っている浮田に少し驚く。

怜子「ええ、なかったわよ」

浮田「（焦り）いや、それは……」

怜子「だから買ってきてね、最新型で長持ち

する空気清浄機」

浮田「（拍子抜け）ああ、わかったよ」

平静を装い着席する浮田。

浮田「（小声）案外、気付かないんだな……」

怜子「何か言った？」

浮田「い、いや、何でもない」

怜子「ああそう。そろそろ時間じゃないの？

会社、遅刻するわよ」

浮田「うん、行って来る」

浮田、首元のネクタイを締める。

○街の中

人の行き交う街の中を、浮田が周りを見渡しながら歩いている。

飲食店や量販店の裏手を歩きながら、放置されている看板や柵などを見る。

浮田「勝手に消すのはダメなんだよなあ……」
呟きながら歩く浮田。

○リサイクルショップ・前

店の外、古い洗濯機や冷蔵庫が並ぶ。

浮田「これなら……」

店内から出てくる金崎に声をかける。

浮田「あのすみません」

金崎「はい、お買い上げですか？」

浮田「いえ、これ消してもいいですか？」

金崎「は？」

浮田「これって、廃棄される物ですよね？」

金崎「（怒って）何言ってるんだあんた、売り

物だよ！」

金崎が洗濯機の側面を叩く、小さく値札が貼られている。

浮田、すみませんと頭を下げ、そそくさとその場を去る。

○自動車整備工場

整備工場の前を歩いている浮田。工場に目を向けると、スーツ姿の白井が整備員に頭を下げて名刺を渡している。

白井「無駄になったものの消去作業を行なっております」

整備員「消去……?!」

足を止める浮田。物陰から様子を伺う。

白井「国から命を受けて対応しております」

整備員「国から？」

耳を傾け始める整備員。

白井が鞆から消去機を取り出す。

あっ、と身を乗り出す浮田。

整備員「こういうのも消せるの？」

整備員が歪んだ台車を指差す。

消去を実行する白井。

整備員「すげー！」

浮田、鞆から総務省の名刺の束を取り出す。

浮田「そうか、これを出せばいいのか」

浮田、使い古された名刺ケースを取り出す。

高輪印刷の名刺を近くのゴミ置場に捨て、
総務省名義の名刺と入れ替える。

○清掃業者・倉庫

掃除用具の準備をしている清掃員。用具が散乱しており、選別に困っている。

浮田「すみませ〜ん、失礼します」

浮田、清掃員の元へ名刺を出しながら
近付く。

浮田の名刺を受け取る清掃員。

浮田「消去法に則って、消去作業に回って
おります」

清掃員「あっ、ああ、ニュースで見たよ」

浮田「でしたらお話が早い。もし不要だと思

われている物があれば私の方で消去させて
いただきます」

散乱している用具を見渡す清掃員。

清掃員「もうどれが使えるか使えないかがわ
かんなくって……」

浮田「わかりました」

浮田、消去機をかざし、対象物を確認。
劣化の%が高い物を消去する。

清掃員、その様子に驚き喜ぶ。

清掃員「凄い！　これで探す手間が省けまし
た！　整理する時間も省けて助かります！」

喜ぶ清掃員、得意げに笑う浮田。

「チャリーン」と消去機の通知音が鳴
る。画面を見ると謝礼金の通知。

浮田「なるほどそういうことか……。俺だっ
て伊達に営業していなかったさ」

浮田、得意げな笑みを浮かべる。

○小学校・運動場

運動場の隅に遊具にされているタイヤ

の山。生徒たちがタイヤを転がしたり乗ったりしている。中には劣化しているものがあり、子供が乗ると凹んで潰れてしまう。

生徒「これハズレー！」

タイヤを投げ捨てる生徒。

教員「（叱る）こら！ 危ないでしょ!!」

教員の横から名刺片手に現れる浮田。

浮田「すみません、よろしければこちら、整

理いたしましたでしょうか？」

タイヤの山に消去機を向ける浮田。

幾つかのタイヤが粒子となり消える。

歓声を上げる教員、駆け寄る生徒たち。

生徒「ハズレなくなっただけ!!」

タイヤを叩き、転がして遊ぶ生徒たち。

浮田、その様子を見て満足げな表情を見せる。謝礼金の通知音。

○自転車屋

店員に名刺を渡す浮田。

古びた自転車や部品を消す。
謝礼金の通知音。

○公民館

町内会長に名刺を渡す浮田。
ポロポロの椅子やテーブル、盆踊りの
備品などを消す。
謝礼金の通知音。

○リサイクルショップ・前

商品を拭いている金崎。
浮田、その後ろからそっと現れる。
金崎「あんたあの時のおっさん。また何？」
浮田「すみません、先日は失礼いたしました」
浮田、名刺を差し出す。
金崎「あんた、国の人だったの」
浮田「何も説明なしにすみませんでした」
金崎、着ぐるみ、古い乳母車、でかい
オルゴールなどを差し出す。
消去する浮田。驚く金崎。

謝礼金の通知音。

金崎に頭を下げ去る浮田。

浮田「転職はまだ先でいいか」

浮田、消去機を手に笑みを浮かべ歩く。

○敷谷の家・前

住宅街の中を歩いている浮田。

敷谷の家の前、庭の見える場所を通り

かかり、軽く躓く。

足元にはゴミ袋が落ちている。

浮田「何だこれ、危ないな」

庭を覗きながら、玄関に近づく浮田。

庭の中はゴミの山。玄関付近にはゴミ

袋が何個も道端まで落ちている。

浮田「おい、飛び出してるじゃないか……」

うわあ……」

怪訝な顔を見せる浮田。足元のゴミ袋を見て、あっ、と消去機を取り出す。

浮田「家の外に落ちてるし、所有権なんてないだろうから、いいだろ……」

ゴミを消去する浮田。

しかし謝礼金の通知音は鳴らない。

玄関が開き、中から敷谷が出てくる。

敷谷「あんた、何」

浮田「えっ、ああ、このお宅の方ですか」

敷谷「ああ。何してんだよ、人んちで」

浮田「私こういう者です」

浮田、慌てて名刺を出す。

乱暴に受け取る敷谷、形相を変え浮田に詰め寄る。

敷谷「人んちの物に勝手なことをするな！

責任者を呼べ！」

浮田「えっ、いや、私は国から指示を受けて

まして……」

敷谷「国からだとお？ またか、またお前た

ちは……!!」

敷谷に胸倉を掴まれる浮田。

消去機が赤く光りエラーが表示されているが、浮田は敷谷に詰め寄られていて気付かない。

× × ×

チェック柄のストーツに蝶ネクタイの苦井が、にこやかに敷谷の家を見ている。

苦井に気まずい顔を見せる敷谷、浮田に詰め寄っていた剣幕は失せている。

敷谷「まさかあんたの管轄だったとは……」

苦井「（笑顔）ご縁ですね」

浮田、苦井と敷谷を不思議そうに見ている。

苦井「浮田さん、明らかゴミ（強調）でも、無許可で消してはいけません。指導が行き届いていませんでした。申し訳ありません」

頭を下げる苦井。その後ろで浮田も頭を下げるが、苦井はすぐに頭を上げ、冷やかな声で「ですが」と続ける。

浮田、頭を上げ苦井を見る。

苦井「このままでは、また行政代執行が入りますよ」

敷谷、黙り込み家の中に戻る。

浮田、訝しげに苦井を見る。

○歩道（夕）　　マンション・ゴミ置き場（夕）

浮田、赤く光っている消去機を苦井に見せている。

浮田「何ですかこの赤いの」

苦井「気付いてなかったんですか？」

浮田「すみません……」

浮田の手から消去機を奪う苦井。

画面に *UnauthORIZED*

tem と表示されている。

苦井「（冷ややかに）浮田さん、消してはいけないものを消してしまっただんです」

浮田「（動揺）えっ……」

苦井「ゴミ、消しちゃったでしょう？」

浮田「いや、あれ、明らかに無駄なものですよね。私も敷地内のゴミはダメだろうと理解していましたが……」

苦井、消去機のエラーを解除する。

苦井「そもそもゴミは対象外です。対象となるのはゴミにされる前に無駄と判断されたものです。ゴミは自治体が回収しますから」

浮田「でも、ゴミと無駄なものの違いって、何だかわかりづらいんですけど」

苦井「簡単に言えば、毎週回収しているゴミは、対象外だと思ってください」

苦井、マンションの前、ゴミ置き場の前で立ち止まる。次の日のゴミが若干数出されている。

苦井「これはゴミとして廃棄をしたものです。所有者はもうゴミとして捨てたい、自治体もゴミとして回収したい、利害の一致です」

浮田「は、はあ……」

苦井「無駄なのに捨てられないものって増えていくんです、消去人はそういう人の為に対処する役目を担っています」

ゴミ置き場に汚れた子供用自転車が「粗大ゴミ」のラベルを貼って捨てられている。

浮田、倒れている自転車を起こす。

浮田「その人がゴミとしてちゃんと出すなら、僕たちの出番は不要ということですか」

苦井「そうです。ですがああいった人は、捨てないどころか、無駄だとも思わないんですよね」

苦井、敷谷の家の方向を見る。

浮田「壊れていて、明らかに無駄でも？」

苦井「ええ、しかも万が一対象外の物を消したときには、罰則規定が設けられています」

浮田「（不安）えっ……罰則……？」

不安な顔をする浮田を見る苦井。

苦井、わざとらしくにこりと笑い、消去機を浮田に渡す。

苦井「でも本当は、消す前にエラーとなる筈だったんです。これでバグが一つわかりました。不幸中の幸いとしましょう」

歩き出す苦井、浮田が後ろから追いかける。

浮田「え、それじゃ……」

苦井「今回はお咎めなしです。ですが消去人規定は今一度確認なさって下さい」

浮田、鞆の中から説明書を出し、見る。

浮田「本当ですね、すみません……」

苦井「モニターはこういった不具合を見付けるのも仕事です。不可解なことは逐一報告下さいね」

浮田「は、はい。ところで……」

苦井「はい？」

浮田「さっきのお宅、何かあったんですか……？」

苦井「ああ……」

立ち止まる苦井と浮田。

○（回想）敷谷の家・室内

ゴミだらけの部屋。

苦井の声「彼は敷谷剛三さん。よくいるゴミ

屋敷の住人です」

浮田の声「よくいるもんですかね……？」

閉じられたゴミ袋を庭に投げる敷谷。

苦井の声「よくいらっしやいますよ。一人になつた途端、孤独で何も出来なくなつてしまふ方」

浮田の声「（息を飲む）」

苦井の声「ずっと奥様が家のことをなされて
いたんです。でもご病気で体が不自由にな
られてからはあんな状態になって」

ゴミに囲まれ、ひびの入ったやや歪な
茶碗で茶を飲んでいる敷谷の姿。茶碗
は畳に直置き。

苦井の声「ある日、その奥様がいなくなって
しまった」

浮田の声「亡くなられたんですか？」

茶碗のひびから漏れ出ている茶。畳に
シミが出来ている。

苦井の声「……行政の指導が何度となく入っ
ていましてね。その度に追いつ返されていた
んですが」

× × ×
普通のマスク姿の行政職員に詰め寄る
敷谷。

敷谷「（焦り）家内が、和子がいらないんだ、
帰って来ないんだ」

眉を顰め、マスクを押さえる行政職員。

苦井の声「奥様、どこにいらっしやっただと思
います？」

× × ×

ガスマスクをつけてゴミ山の中を覗く

苦井、行政職員たち。

ゴミ山の中の和子の遺体。

○元の歩道（夕）

浮田、言葉を失い愕然としている。

苦井「あのゴミの山がなければ、奥さんをち

ゃんと弔うことが出来たでしょうに」

浮田「（強めに）それでもあのゴミを消して

はいけないんですか？」

苦井「（淡々と）ええ、無駄だと認識されな

い以上、消すことは出来ません」

浮田、やるせない顔で敷谷の家を見る。

○浮田の家・外観（夜）

灯りのついている浮田の家。

浮田の声「ただいまー」

○同・リビング（夜）

部屋の隅に新しい空気清浄機。

ソファーに座っている怜子。

テーブルに書類、その書類を押さえて

いる左手。薬指に指輪。

浮田「ただいま。ああ、その空気清浄機、ち

ゃんと動いてる？」

怜子「（冷たく）ええ」

浮田「だったら良かった」

怜子「退職金で買ったのかしら」

浮田「……え」

怜子、立ち上がり、浮田へ高輪印刷か

らの「退職手続きのお願い」の書類を

突きつける。

怜子「最近、会社からよく封書が来てたでし

よ。毎日出勤しているのに、おかしいと思

って開けたの」

浮田「お前、勝手に開けるなよ……！」

怜子「だったら、何でちゃんと言ってくれないの?! またリストラされたのがみっともなかったから?!」

浮田「そ、それは……」

怜子「リーマンショックの時は、世の中滅茶苦茶だからしょうがないって思ったけど」

浮田「俺が悪いって言うのかよ」

怜子「休みが取れないどころか、仕事が取れないんじゃないじゃない」

浮田「何だと……?!」

やや乱暴に怜子の肩を掴む浮田、痛がる怜子にハツとして肩から手を離す。

浮田「ごめん……」

浮田から目を逸らす怜子。

浮田「何も言えなかったのは、今、別の仕事を……」

怜子「別の仕事？」

浮田「ああ、国の為になる仕事」

浮田、怜子の両肩を掴み、自信満々に言う。

浮田「今はまだ言えないんだ、でも今までよ
りやりがいのある仕事で。その内ちゃんと
報告するから待ってくれ」

怜子「……わかったわ」

怜子、浮田の手を離し、解せない顔で
リビングを出て行く。

浮田、その後ろ姿に溜息をつく。

○敷谷の家・前（朝）

外から庭の中を覗く浮田。

浮田「本当にどれも消しちゃだめなのか？」

ゴミ袋だけではなく掃除機やポット、
机などの家財も多数ある。

浮田「全部消せたら謝礼金も沢山入るのに」

浮田、玄関の前に立ち、意を決してイ
ンターホンを鳴らす。

玄関を開ける敷谷、背後にはゴミの山。
顔を顰める敷谷。頭を下げる浮田。

浮田「昨日は大変失礼をいたしました、その
謝罪に改めてお伺いしました」

敷谷「謝罪？ いいよもう、帰ってくれ」

浮田「そうおっしゃらずに、よろしければ私にお手伝いをさせて貰えないでしょうか？」

敷谷「手伝い？」

玄関へ一步上がる浮田。

浮田「ええ、物が沢山あって大変かと思えますので、それを整理させていた
だきたく」
前のめりになる浮田。

○同・室内（朝）

部屋の中に入る敷谷。匂いに鼻を手で覆いつつ、敷谷に言い寄る浮田。

浮田「ちゃんと必要な物とそうじゃない物を分けて処理しますんで」

敷谷「いい、やめてくれ」

浮田、羽の取れている扇風機を指す。

浮田「だってこの扇風機、もう使えないでしょうから僕が処分しておきますよ」

敷谷「処分？ これはゴミじゃない、何でゴ

ミだと決めつけるんだ。それは和子と一緒に買ったものなんだ」

言葉に詰まる浮田、ゴミ袋の山に刺さっているラジカセを指す。電源コードが途中で切れている。

浮田「これも、電源が切れて使えません」

敷谷「ダメだ、和子は好きな歌をそれで聞いていたんだ」

浮田「このお茶碗、割れてしまっています」

浮田、床に転がっているヒビの入った茶碗を持つ。

敷谷「それは、和子が作ってくれた茶碗なんだ、熱海旅行へ行って……」

浮田の手から茶碗を奪い取る敷谷。

敷谷「やめてくれ、何も知らないあんたが、どうして和子の物を消そうとする」

浮田「だって、和子さんはもう……」

浮田、最後まで言わずラジカセを見て、俯き嘲笑いながら呟く。

浮田「うちの嫁は、自分のものが消されても

何にも気付きやしませんでしたよ」

敷谷「（鼻で笑う）そいつに何の思い出があったんだ、忘れてしまいう程、無駄なもんだったんだろう」

浮田「ええ……っ？」

浮田、言葉に詰まり、困惑の表情。

○同・前（朝）

敷谷に追い出され、玄関から出てくる浮田。

敷谷「もう二度と来ないでくれ！」

強く戸を締める敷谷。

溜息をついて立ち去る浮田。その横に大量に荷物を積んでいるワゴン車が通り過ぎる。

浮田、その車に目を付け、車が数メートル先で停車するのを見て駆けつける。

浮田の声「あのく、すみません、私、総務省から……」

○総務省・モニタ室

真っ白な壁の無機質な部屋。壁やデスクにモニタが複数設置されている。タブレットを手に椅子に座っている苦井。タブレットの画面には「消去数リスト」の棒グラフ。名前が並び、浮田の名前もある。グラフの数値が他よりも飛び抜けている。

○ラブホテル街

浮田、ネットカフェから出て来る。

頭を下げる店員に、得意げな顔の浮田。

浮田「いえ、お役に立てたなら何よりです」

ネットカフェを後にする浮田。

謝礼金の通知音。

浮田、にこやかに消去機を見ながら歩き、ラブホテルの前で立ち止まる。

浮田「そうか、この辺もやらせてくれるところあるかなあ……」

ニヤリと笑う浮田。その横を通りすが

るカップル、浮田の呟きにドン引きの
声を上げる。

浮田「えっ、ああっ、違う！　違います！」
慌てて早足で立ち去る浮田、不意に立
ち止まり、目を見開く。

怜子が中野忠司（30）と腕を組み歩い
ている。

浮田「怜子……？」

凝視する浮田、物陰に身を隠しながら
後を追いかける。

怜子たち、ラブホテル前で立ち止まる。

中野「ここ、どう？」

怜子「ここ？」

頬に左手を当て、首を傾げる怜子。そ
の薬指に指輪はなく、化粧も少し濃い。

浮田、電柱の陰からその様子を見て、
唇を噛み締めている。

怜子たち、ラブホテルへ入って行く。
驚愕する浮田。

○同・物陰

浮田、ふらふらと建物の物陰に入り、壁にもたれて項垂れる。

浮田「あいつ……俺というものがあいながら……！ 何の為に働いてきたと思って！」

浮田、何度も壁を叩き、しゃがみ込む。

カタツと地面に硬質な物がぶつかる音。

浮田、ジャケットのポケットから消去機を取り出す。

消去機を見る浮田、持っている手が震え出す。

○同・ラブホテル出入口前（夕）

ホテルの中から腕を組んで怜子と中野が出てくる。

玲子の目の前に立つ浮田、驚く玲子。

中野「どうしたの？」

怜子「いや……」

中野「夕食どうする？ どこかで美味しいもの食べて帰ろうよ。ああ、そこすみません」

中野、浮田を退かそうと手を掲げる。

浮田、その腕を掴み、怜子から中野を
引き剥がす。

中野「ちょっと、なんなのおじさん」

中野を無視して怜子の肩を掴む浮田。

浮田「怜子、これはどういうことだ」

怜子「どうもこうもないわ」

怜子、浮田から目をそらす。

中野「怜子さん、このおじさん誰？　もしか

して旦那さん？」

怜子「（不服そう）そうよ」

中野「ああ、ウダツの上がない旦那って、

あんたか」

浮田「は……？」

愕然とする浮田。

怜子「そうよ、私はもう貴方に飽き飽きして

いたの！」

浮田、怜子に手を振り払われる。

○（イメージ）浮田の家・リビング（夕）

物が少なく、誰もいない整然とした部屋。電気は消えている。

怜子の声「もう子供も出て行って、二人だけになった時、貴方と一緒にいる理由がなくなっただの」

テーブルに置かれている封書の山。

退職手続きを要求する書類。

怜子の声「また仕事なくなって、今から新しい仕事？ 上手くいくわけないじゃない、貴方のような取り柄のない人が」
ポツンと置かれている空気清浄機。

○ラブホテル前（夕）

呆然としている浮田。

強い口調で話し続ける怜子。

怜子「ねえ、貴方、私にどんな愛情をくれていたの？ 貴方について何が楽しいの？」

浮田「お前……っ！ 誰のおかげで生活できていたと！」

怜子「ただ生活するだけなら誰でもいいでし

よう?! もう貴方という時間がつまらない、
時間の無駄なの!」

浮田「ふざけるな!」

浮田が怜子に掴みかかろうとすると、
中野が立ちはだかる。

浮田「どけ!」

浮田、中野に殴りかかろうとするが、
先に中野から殴られてしまう。
地面へ倒れる浮田。

怜子、浮田を冷ややかに見下ろす。

怜子「行きましょ」

中野の腕を取り、背を向ける怜子。
よろめきつつ立ち上がる浮田、ポケッ
トから消去機を取り出す。
立ち去る怜子と中野の後ろ姿へ、震え
る手で消去機を向ける。

「No Item」とエラー表示。

浮田「……ちっ、ダメか……! くそ……!!」
再び中野に掴み掛かる浮田。
乱暴に振り払われ倒れる浮田、そのは

ずみで消去機が地面に転げ、ビー！

と何か確定処理されたような音が鳴る。

（誤作動の音）

中野「うっぜえなおっさん。あんたはもう用
済みなんだって、言われたでしょ」

浮田を蹴る中野、倒れる浮田。

哀れみと居た堪れない表情で見る怜子。

怜子「ねえ、もういいから。行きましよう」
去る怜子たち。

浮田よろよろ起き上がろうとすると、
手元に消去機。怜子と中野が消去対象
物として表示されている。中野の劣化
のパーセンテージが15%、怜子は5
0%。

目を見開く浮田。

消去機を手に取り、震える手で中野の
後ろ姿へ向ける。

浮田「くそおおー！！」

玲子の隣で中野の体が粒子化し、その
場から消える。

怜子、驚き悲鳴を上げる。

浮田も呆然としている。

怜子「何……?! ひっ、人殺……っ！」

言い切る前に粒子化する怜子。

消去機を向けている浮田、肩で息をし

ながら膝を落とす。

額から汗が伝っている。

けたたましくアラート音が消去機から

鳴り響く。消去機を見る浮田。

消去機には赤く「ALERT」と表示

されている。

機械的なアナウンスボイスが流れる。

アナウンス「重大な違反消去を検知しました。

モニターナンバー004。浮田達夫を拘束

します」

浮田「はあ?!」

慌てて消去機を地面に叩きつける浮田。

アラート音が止む。

浮田、辺りを見渡し、慌てて消去機を

拾い走り去る。

○繁華街（夕）

走る浮田。

その目の前に黒塗りの車が停車する。

立ち止まる浮田。

車の中から黒スーツにサングラスをか

けた男——追跡者が数名降りてくる。

男の一人が浮田を見付け指を差す。

浮田、慌てて反対方向へ逃げる。

○雑居ビル・裏（夕）

走ってくる浮田、ビルの陰に隠れ、追

跡者たちは前を通り過ぎやりすごす。

浮田、息を切らし、ジャケットから消

去機を取り出す。画面にひびが入って

いるが稼働している。

浮田「これがあるから追いかけられるのか」

立ち上がり、消去器を地面に叩きつけ

ようとすが、踏みとどまる。

消去機を持つ左手、薬指には指輪。

その指輪に触り、唇を噛み締め、よろ

めきながら非常階段を登り始める。

○同・階段（夕）

夕陽の差す階段。

浮田、ゆっくり階段を上りながらぼやく。

浮田「仕事はまたリストラされて、嫁にも愛想を尽かされて、結局俺の人生ってなんだっただ……」

浮田、階段の踊り場から街を見る。

× × ×
（フラッシュ）

ゴミに埋もれている敷谷の部屋。

× × ×
浮田「俺もあなるのか……」

階段を登っていく浮田。

× × ×
（フラッシュ）

敷谷とひび割れている茶碗。

× × ×

浮田「俺には残したい物も、残したい思い出もなかったんだ……」

× × ×

(フラッシュ)

浮田の家。

不用品が消去された後のクローゼット。

× × ×

ビルの下、浮田の姿を見付ける追跡人たち。ビルの中へと入って行く。

浮田、再び階段を登り始める。

○同・屋上(夕)

夕暮れの光景。

呆然と歩く浮田。

浮田「消去人の仕事もこれで終わり。俺にはもう何も出来ることはない」

背後から追跡者たちの足音。

浮田「そんな俺が世の中にいる意味なんてあったのか？」

追跡者たちが屋上へ辿り着く。

柵の前に立つ浮田、手すりに捕まり、手を震わせじっと止まる。

追跡者「待て！」

振り返る浮田、じわじわ近付いて来る追跡者に慄く。

浮田、ポケットから消去機を取り出す。消去対象外の設定画面が表示されている、項目「人間」はチェックが外れている。

浮田「無駄だったのは、俺か……」

浮田、涙を流しながら嘲笑し、消去機を自分に向ける。

止めようと駆け寄る追跡者たち。粒子化する浮田の姿。

追跡者の手が届くも、消える浮田。地面に落ちる結婚指輪の乾いた音。立ち尽くす追跡者たち。

○同・空（夕）

上空から見える追跡者たち。

上空にはドローンが飛んでいる。

○屋上の映像（夕）

立ち尽くす追跡者たちの映像。

○総務省・モニタ室（夕）

壁やデスクに並ぶ複数のモニタ。

その全てに屋上の映像が映っている。

モニタを見ている無表情の苦井。

苦井「ああ、こうなりましたか」

苦井、溜息をつき、キーボードを叩く。

モニタの一つがリストを表示する。

苦井「でも、こっちのシステムはちゃんと稼

働していたようですね」

表示される「消去不可リスト」。

一覧には浮田、怜子、中野の名前が表

示されている。

○留置所（朝）

目を覚ます浮田。

灰色の天井と壁。

慌てて上半身を起こし、辺りを見渡し、自分の体を触りたくる。

浮田「夢……？」

浮田、鉄格子へよろよると近付き掴む。

浮田「冷たい……」

手を離し、広げた手を見る浮田。

左手薬指に指輪はない。

浮田「夢じゃ、ない……のか？」

足音が響き、鉄格子の向こうに苦井が現れる。

苦井「お目覚めになられましたか」

浮田「一体、これは」

苦井「ご説明しましょう」

鉄格子の解錠音。

鉄格子の向こうで呆然としている浮田。

○取調室（朝）

小さな机を挟んで座る浮田と苦井。

机の上に消去機の説明書。不許可の説

明。「生物は消去しても一週間以内に復元されます」の記載を苦井が指差す。

苦井「ほら、ちゃうんと、読んでおいて下さいと言ったでしょう？ 残念でした」

説明書をパンッと閉じる苦井。

項垂れる浮田。

浮田「なんだ……これも無駄になったのか」

投げやりにふっと笑う浮田。

苦井、溜息をつく。

苦井「確かに、無駄なものを消すというのが消去人の役目ではありませんが」

苦井、浮田の前に握った手を差し出す。

広げると浮田の結婚指輪。

苦井「それらは、かつては無駄ではなくちゃんと意味のあるものだった。無駄だと思っ
て捨てたものも、失くしてから無駄ではな
いとわかることだってあります」

指輪を受け取る様子のない浮田。

苦井、机の上に指輪を置く。

苦井「人間とは非常に烏滸がましい生物です」

指輪をじっと見つめる浮田。

苦井「貴方の消去人の資格を剥奪します。今回の違反行為は罰金の対象となりますので、謝礼金から天引きしておきますね」

苦井、机の上に謝礼金の明細を出す。
何十万もの謝礼金が発生していたが、罰金の額もそれに等しく。支払額は数十円となっている。

○街中

寄れたスーツでとぼとぼと歩いている浮田。

大型モニタに流れているニュース。
消去法の施行が見送りになった報道。
アナウンサー「実施にあたり運用上の問題点
が多数生じ、見送りを決めたと……」
浮田は見向きもせず歩いて行く。

○浮田の家・玄関

玄関の中に立つ浮田。

足元には男物の靴しかない。

○同・リビング

電気の点いていない部屋。

無言で入って来る浮田。

棚の中が半分くらい消えており、空気
清浄機やポットなど、幾つかの家財が
消えている。

テーブルの上に離婚届と指輪。

浮田「機械なんてなくても、あっさり消える
もんだ……」

肩を落とし、悲しげに笑う浮田。

○ハローワーク・受付（朝）

求人情報を見ている職員の前川。

T「数日後」

浮田、背中を曲げて前川の話聞く。

前川「そうですね、選り好みしなければ仕
事は沢山あるんですけどねえ。培われた経
験は全く生かせないわけじゃないですよ？」

浮田「は、はあ……」

前川「広く目星を付けて、どうしても出来ない仕事を消去法で消して、まずは面接を受けるだけ受けてみてはどうですか？」

浮田「消去法……はい、そうですね……」

苦笑いして頷く浮田。

○敷谷の家・前

ハローワークの封筒を持って歩いていく浮田、敷谷の家の前で立ち止まる。庭を覗き込むとゴミの山、以前より増えてい

えている。
呆然と庭を見る浮田。

○同・玄関

インターホンの音。

戸を開ける敷谷。

敷谷「またあなたか」

浮田「こんにちは」

敷谷の手には新たなゴミ袋。

敷谷「余計なことをしないでくれと言っただろう。帰ってくれ」

浮田「今日は、違うんです。あの、話を……聞いて貰えませんか？」

敷谷「話？」

浮田「実は、消去の仕事は辞めさせられました。その上、嫁にまで逃げられてしまいまして……」

項垂れる浮田。

○同・居間

ゴミ袋だらけの居間。

入って匂いに顔を顰める浮田。

部屋を見渡すと、隅の小さな机に位牌が置いてあるのを見付ける、その付近は比較的ゴミが少ない。

浮田、正座して位牌に手を合わせる。側のゴミ袋の下に古ぼけたアルバムがあるのを見付け、手に取り開く。

敷谷、ひび割れた茶碗と普通の茶碗を

持って来る。普通の茶碗を浮田に渡す。
浮田、アルバムを机に置き茶碗を受け取る。

敷谷「それ……どこにあった？」

浮田「え、ここに埋もれていました」

敷谷「そうか……」

開いているページには、和やかに笑う和子の写真。

浮田「素敵な奥様ですね」

敷谷、アルバムの中から和子の写真を剥がし取る。

敷谷「遺影になる写真がやっと見つかった」

浮田「お写真、どうされるんですか？」

敷谷、答えられず黙り、位牌の横に写真を置く。

位牌の横には今にも崩れそうなガラクタの山。

浮田、呆れたような表情を見せる。

浮田「そんなんじゃない、また埋めますよ」

敷谷「なに？」

浮田「いつまで、こんなゴミ山の中にいるんですか。これじゃあ、あなたに尽くしていた奥さんが全く浮かばれない」

敷谷「なんだと……?!」

掴みかかろうとする敷谷。

弾みで遺影の横のガラクタが崩れ、写

真が埋もれる。

浮田「ほら……」

敷谷、慌てて写真を探す。

見つけるが、取り出す時に破ける音。

手にある写真、和子の姿は残ったもの

の、角の方が破れている。

震えている敷谷の手。

敷谷「お前に何がわかる……」

浮田「……あなたは、私かもしれません」

敷谷「はあ？」

浮田「埋もれていることすらわからずに失く

しました。いや、埋もれていたのは自分の

方だった」

敷谷「……は？」

浮田「このままでは本当に世の中から無駄なものとして人生が終わってしまいます、家族との思い出も全て」

浮田、破れた写真のかけらを足下に見つけ手に取る。

浮田、少し泣きそうな声で。

浮田「せめて、写真立てくらいは買いませんか……？」

敷谷、浮田から目を背ける。

敷谷「買わなくても、部屋のどこかにある」

浮田「じゃあ、探しましょう……！」

敷谷「は？」

浮田「ここにあるものは、敷谷さんにとって無駄な物ではないんですよね」

浮田、床を見ると、敷谷の持っていた茶碗。

お茶が漏れて畳を濡らしている。

浮田、ポケットからハンカチを取り出して茶碗の下に敷く。

浮田、立ち上がりゴミ山を見る。

浮田「他にも大事なもの、埋もれているかもしれない。それを探す手伝いをさせて貰えませんか？」

浮田、アルバムを敷谷へ手渡す。

敷谷「……勝手にしろ」

浮田、ジャケットを脱ぎ、腕をまくる。

○同・庭（日替わり）

ゴミ袋の山が半分くらいに減っている。

縁側の辺りで浮田と敷谷がゴミ袋を開いて分別作業をしている。

浮田「実は次の仕事が決まったんです……」

敷谷「（興味がなさそうに）ほう、そうかい。

……あっ」

ゴミ袋の下から手紙が出てくる。

宛名に「和子より」とある。汚れてはいるが、経年劣化は然程ない封筒。

浮田「奥様からの手紙……？」

敷谷、浮田に手紙を押し付ける。

浮田「は？　僕が読んでどうするんです?!」

渋々手紙を開く浮田、片付けを再開する敷谷の後ろで音読する。

浮田「あなたへ、この手紙を読んでいる頃、私はきつとこの世にはいないと思います」

敷谷「……?!」

敷谷、動きが固まる。

浮田「最後まで頼りなくてごめんなさい。私がいなくなつたあとどうしたらいいか、ここに書いておきます」

浮田、二枚目を見る。

病院の連絡先、ヘルパーの連絡先、ごみ収集について、行政連絡先などの羅列。

浮田、次の便箋を捲る。

浮田「私と一緒にいてくれてありがとうございます
いました、和子」

浮田の後ろから敷谷の嗚咽が聞こえる。

敷谷「何でお前が謝って、礼を言うんだ……
っ。俺がどれだけお前に言えばいいと……
うずくまる敷谷。」

浮田、背後から背中を摩り、手紙を敷谷に握らせる。

浮田、空を眺め。

浮田M「俺にはまだ……」

× × ×

浮田と敷谷の様子を庭の外から見ている苦井。

スマホを取り出し電話をかける。

苦井「ああ、もしもし。例の行政代執行の案件ですが、一旦保留でいいと思いますよ。

ええ、まあ、様子を見ましょう」

苦井、電話を切る。

苦井「傷の舐め合いが功を奏することもありますか」

苦井、薄ら笑みを浮かべ立ち去る。

○同・居間

以前より半分以上片付いている居間。電話をしている浮田の声。

浮田の声「（申し訳なさそうな声で）もしも

し、怜子。あの改めて話をしたくて……」
和子の位牌と、傷だらけの写真立てに、
角の破れている写真。
側には金継ぎされた茶碗が置いてある。

(了)